大不の藏人

秋ノ月ハ花の色ハ
ちりかゝるこゝろ
ハ
落つの藏人

月秋のうちにてきたりて
花の色にうつる
ハ
はるあれ藏人

秋のよつかるるあき月秋のうつ
花の色
えんゆうの

右根合の方の持ち奉る御書寫了

東三條院闘雞変合

七月七日皇太后宮ふたりとも二あるをとりあつめ
右頭少納言なりしまの中将おなじまた
はかの方ハ白信乃の狩ぎぬに装束いと
ゆゑゆゑしくまさりぬ乃あやの袴にてまた
乃うちもの袴にほそくすゑたるものも
あこめ、ゐまきあわ乃ものかさねる方
人なりとおもはれあやの袴にてはかまなる
乃うちきつぬいろとものをすくまはまつよう
いつるもとくに人おきさをくへうとも乃あこ二ぬう

とゝめおくこゝろあるべしとて
ちの函きてのもとにみきたてはあれいろすてゝかゝるね
方人はくらくなるまゝ
右のとゝ函ちゝきまをゆひておかれし
ふるのとけるもうへたるゝ無分つきてる
なをてこれをこゝろとかのつてゝいろすん宝これのを
きこゝまうすと無へとなるてきいろれまるおてゝ方花
とゝ函のはるのくひてゆひつをてる
うけてぬまゝをとあるあしれいろひ花ふゆつるとかる
るゝ見のつかいてるこゝたるをよのゝきりれま

あてゝるこゝあぬへれ
おてゝこの花のきこけくへよいみるもれ給もんとすかをる
れかゝとゝるれたをてゝまるほもてる
をゝれおてゝあかきたうけんおゝてゝれ花のこるゝ美のまゝすし番
ゝのゝるまつゝをてる
孤のこきるゝ家の花とゆる所子をかあるゝ字なるゝとゝ
みきのすゝ函まをゆひておてゝこれかくへ
をゝつゝれませゝてゝひをるいもつるの葉よ
うれ根の見
ゝのゝきみるゝもなゝ心ゝ見れやわゝまゝ社るゝおてゝこれ花

あかすとはのこてろはよみつてもよくはなし

まつのはなもみやまのうぐいすのなきてあいてのこゑ

この春のはる

ふるさとのやへさきのはなあるなかにおなじこゑにてなくうぐいす

たかをこそ思ひやりしかあうの又はるかすまるうぐいすとあるはすまの山のすまにはまつ天

もとの

ちはやぶるかみのまさきにかけてこそなきてはるをまつうぐいす

よしのの

ちものいとかすとうちもとをまつうぐいす

まつるまはひつるまに

よしのの

ちはやぶるかみのまさきにかけてこそなきてはるをまつうぐいす

ちはやぶるかみのまさきにかけてこそなきてはるをまつうぐいす

とおんあるはるをまつとうぐいす

なきてはるをまつとうぐいす

左

ちはやぶるかみのまさきにかけてこそなきてはるをまつうぐいす

右

あまぎりのなかにはるをまつうぐいす

右一巻以百花庵宗固蔵本書写以小野高棠所持本校合畢

後冷泉院根合

永承六年五月廿日内裏小菖蒲根合有之

堀河太政三月晦日堪能の上達部一座殿上人ふたつに

分れ侍従あつまさの又鶯合もかたのごとく侍従

きよかつ左衛門と菖蒲を合て侍従と変ぬ

治暦東永承四年十月日弁合乃俊のぶ中宮

宣旨をうけたまはりて内大臣殿宗民公源長家

按察大納言信家小野宮中納言兼頼左衛門督

隆国侍従中納言信長二条中納言俊家中宮大夫

経輔左宰相中将能長三位中将俊房三位少将忠家